

# 巻頭言

残暑の候、皆様いかがお過ごしでしょうか。日本中医学会は、2010年に発足し、その会誌である本誌も翌2011年1月に創刊され、理事長でもある酒谷薫編集長のもと発展してまいりましたが、このたび体制を一新し、篠原昭二先生と小生を副編集長として装いも新たに再出発することとなりました。改めまして、よろしくお願い申し上げます。

近年わが国における伝統医学は、激変と言ってよい荒波に揉まれております。明治政府による漢方排斥により壊滅的な打撃を受けた漢方医たちは、昭和の初期には全国で100名に満たないほどの弱小勢力となっていました。その後の先達の血のにじむような努力のおかげで、現在は全国のすべての医学部・医科大学で東洋医学が教えられるようになりました。

しかしながら、その内容はどうか。確かにいくつかの大学では情熱をもった専門医によって魅力的な講義が行われていますが、多くの大学では漢方の専門家は1名いるかないかという状況で、いたとしても古典も読んでいない、西洋医学だか東洋医学だかわからないような教育をしているところが多いと感じるのは私だけでしょうか。現在、国内の全医科大学の漢方教育担当教員を束ねて、漢方教育の標準化を行おうという動きが出てきています。私はまだその段階ではないのではないかと感じておりますが、孤軍奮闘の状態です。

私の在籍しております東京医科歯科大学は、不思議なことに中医学を熱心に勉強している卒業生が多く、大学の講義も中医学を中心に行っています。しかし、標準化が行われてしまうとカリキュラムを大幅に変えざるを得ない状況になってしまいます。日本の漢方教育を標準化すべきかどうか、まだそこを議論すべき段階ではないかと思うのですが、標準化ありきで議論が進んでいることに不安を感じています。私は中医学も古典からみれば大きく改変されていると感じていますが、それでもその基礎を『素問』『靈枢』におき、『傷寒論』に偏りすぎずに歴史から学ぼうという姿勢がみられると思います。それぞれの時代背景を理解し、その当時の医師の考え方に思いをはせ、そしてようやく処方が理解できるのではないかと私は考えます。

別の見方をすれば、そろそろ将来の日本の東洋医学のあり方を本気で考える時が来ているのかもしれない。日本漢方や中医学といったような区別ではなく、現在および将来の日本の医療における伝統医学のあり方というものを、行政や製薬などを含めて学際的な論議を引き起こす時期が、もうすぐそこに来ていると感じます。そのなかで、専門家として正しく伝統医学を理解していることが、われわれ日本中医学会の会員には求められていると思います。皆様のご指導をよろしくお願いいたします。

2014年8月  
日本中医学会雑誌 副編集長  
別府正志